



『O B便り 世界の国からコンニチハ』 第3弾アメリカ編

国際社会コミュニケーション学科教授 奥 村 訓 代

インドネシアを皮切りに始めた日本語教師O B便りも韓国を経て、今回は第3弾としてアメリカ（アラスカ）編をお届けすることになりました。登場する寒川君は、平成17年度人文学部国際社会コミュニケーション学科の卒業生で、やはり奥村ゼミの卒業生です。留学にしても日本語教師にしても、欧米を希望する人は多いのですが、問題は皆さん自身の英語力です。寒川君のように実力が伴っていれば、すべてが可能なのは言うまでもありません。しかし、一番肝心なのは、日本人としての常識レベルの日本語・日本文化に関する知識と日本語を第2外国語として教えることの出来る日本語教授能力です。寒川君は、TOEFLは勿論、日本語教育能力検定試験にも在学中に合格した実力者です。以下の話にも出てきますが、モンゴル、アメリカと渡り歩き、現在は静岡の日本語学校で専任として迎え入れられています。世界中を渡り歩く「21世紀の新しいパスポート」として、1人でも多くの高知大生が日本語教師として羽ばたいてくれることを願って止みません。

ここで、高知大学人文学部日本語教師養成課程の現状についてお話しをおきます。高知大学人文学部では、1988年に日本語教員養成コースを開設以来、既に30人前後の日本語教師を世界各国に輩出しています。国内では、大阪、静岡、京都、福岡、高知、長野と全国的に日本語教師として活躍し、世界でも、サウジアラビア、韓国、インドネシア、中国等で3年から永久就職組まであります。最も興味深いのは、各地各国からそれぞれが育成した優秀な学生を国費生や交換留学生、あるいは私費留学生として高知大学に送ってくるというFeed back 関係が着実に身を結びつつあるという

点です、益々 O B が高知大学の発展や広告塔として活躍してくれることを期待しています。

最後に、高知市の姉妹都市でもあるインドネシア・スラバヤ市にある日本総領事からのメールを引用して今回の結びとします。

改めまして、当地における日本語教育における先生を始めとする関係者の皆様のご協力に感謝申し上げます。と、言いますのも、当地東ジャワ州における日本語教育は高知大関係者抜きには語られなくなっているからです。例えば、昨年の文部科学省（日研生）試験におけるブラティジャヤ大学の一次筆記合格者3名は、バンドゥンの名門パジャジャラン大学に並んで国内最多でした（しかもブラティジャヤ大学は3年制との大きなハンディがあります）。ドクター・ストモ大学も日本語能力試験2級合格に現役11名を輩出（ブラティジャヤ大は7名）するなど、国内トップレベルの成績を収めています。言ってみれば、日本総領事館もしくは国際交流基金の仕事のかなりの部分を高知大関係者に担って頂いているわけです。（鈴木領事の原文より）

「世界で羽ばたく日本語教師」

静岡国際日本語センター教員 寒川 太一

光のカーテンが変幻自在に色を変え、形を変え

て北の夜空にたなびいています。オーロラは、光の鍵盤とも喻えられます。みなさんは、オーロラが旋律を奏でるのをご存知でしょうか。私はそのメロディーをこの耳ではっきりと聴きました。

私はこれまで日本語教師という窓を通じて、日本の生活からは想像もつかない、されど地球上に確実に存在する異文化を体感してきました。標高五千メートルを越すヒマラヤ高地。馬にまたがり大草原駆け抜ける遊牧生活。天球全体をぐるりとひと回りする巨大天の川。そして、氷点下四十度でのアラスカ先住民のたたずまい。テレビやインターネットで簡単に映像が見られる時代だからこそ生の体験は鮮烈で、刺激となり、感動となり、記憶に焼きついて離れません。

高知大学在学中は、旅行と旅費のためのアルバイトに明け暮っていました。それ以外は図書館にこもり、何かに憑かれたように本を読み漁っていました。世界には多種多様な言語、食文化、衣服、建築、そして神様のかたちが満ちていることが嬉しく、夢中で歩みを進めました。振り返ると、アジア・ヨーロッパを中心に三十カ国あまりを回っていました。ちょうどこの頃、自分が得られるものはどこだ、自分が学べるものはどこだ、というように他人から与えてもらうことばかり考えていることに気がついたのでした。いつまでも独りよがりな学生生活が続くわけではない。与えてもらえばかりではなく恩返しができる仕事を見つけなければならぬ。それも実世界の探検と、知の世界の探検が同時に出来る仕事とは何か。この問い



アラスカ大学 日本語学科講師研究室にて

を突き詰めた結果が、「日本語教師」でした。人文学部の奥村教授に師事し、「言語」とは何か、「文化」とは何か、「日本」とは何か、「教える」とは何か、そして「人間」とは何かを考察しました。

大学卒業後、ウランバートル（モンゴル）での日本語ボランティア、日本国内（神戸）の日本語学校での講師を経て、アラスカに辿り着きました。アラスカ大学応用言語学科で教師と大学院生の二足の草鞋を穿く、忙しくも充実した毎日を送っています。朝八時には教える方の授業の準備を始めます。緯度が高いために太陽は姿を見せず、暗い中をがんばってベッドから飛び起きなければなりません。効率よく業務をこなせば、ぼんやりと薄明るい昼下がりには受講する方の授業の予習に取りかれます。あらかじめ読んでおく文献の量が膨大で、息をつく暇もないまま教室に駆け込みます。授業が終わるのが午後九時ごろ。遅い夕食を噛み碎きながら、「この苦労が将来ものを言うのだ」と自分に言い聞かせます。実際に「理論」と「実践」のバランスが取れる今の環境は、新米教師としての修行を積むのに最適です。勉強と息抜きのバランスもまた大切です。週末は何もかも忘れ、おもいっきりカヌーを漕ぎます。漕ぎ疲れたら、露天風呂に浸かりながらオーロラが現れるのをじっと待ちます。大自然に自我が溶け出しどこまでも広がっていく解放感。この瞬間のためにがんばっているようなものです。一般に「日本語で飯は食えない」という定説がありますが、後輩のみなさんは大胆な夢を持ってください。高知大学の先輩達が、世界各地でたくましく日本語を教えているのですから。

明日になれば、また新たな週が始まります。奨学金を取る戦い、教え子の日本語力を伸ばす戦い、同級生を論破する戦い、教授に挑む戦いが私を待っています。でも、あとしばらくだけオーロラの音色に酔いしれてみたい。気力がみるみる充足されていきます。

日本語教育という武器で知らない国や地域を渡り歩く、私の冒険はまだ始まったばかりです。

※「オーロラに吠える」次ページカラー写真参照